
マリコさん　～ 謎な彼女は今日も元気～

栗田隆喬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリコさん　　謎な彼女は今日も元気

【Nコード】

N1627H

【作者名】

栗田隆喬

【あらすじ】

マリコさんと俺の日常。ジャンルはごった煮。路線はほのぼの、言葉遊び。基本的に毎話読み切り、800文字程度の掌篇集。

第八話 学園祭の出し物は

「学園祭の出し物なんだけど」

マリコさんが紙を片手にやってきた。

「まだ早くね？」

「夏休み明けたらずぐだもん。実行委員会なんか、もうバリバリ働いてるよ。パンフ作りとか、協賛金集めとか、地元テレビの取材、サークル用機材のレンタル手配、後夜祭に芸人呼んだりとか」

結構本格的だったことに感心しながら、俺は文庫本のページをめくった。

「でね。私達も出店して、学園祭に貢献しようと思ったの。まさに生徒の鑑よね。褒めて、久瀬くん。褒めて！」

「はいはい。えらいですね」

「もつとまじめに褒めなさいっ！」

俺は取り上げられる前に本をとじ、マリコさんの瞳を正面から見つめた。

「マリコさん。……えらいよ」

「いやあ。そんな真っ正面から褒められると、照れる。もしかして久瀬くん、惚れた？ ね、惚れた？」

「ああ。惚れたよ。最高だ、マリコさん」

「そうですか。惚れましたかあ。……もう一回」

「マリコさん、えらいね」

「うふふふ。もつと！」

それから五回くらい褒めると、マリコさんはやっと満足そうにうんうん、と頷いた。

「で、久瀬くん。出し物なんだけど、喫茶店にしようかと……」

「メイド喫茶でもやんの？」

メイド姿のマリコさん目当てに男子連中は駆けつけてきそうだと、ところが首を振る。

「メイドなんて、もう古いよ」

「じゃあ……執事喫茶？」

男装のマリコさんも人気が出ると思う。特に女子に。

「惜しいなあ。なんだと思う？」

俺は首をかしげた。

「ヒゲ喫茶」

「何それっ！」

「執事喫茶……、シツジ喫茶、ヒツジ喫茶、ヒゲ喫茶、という連想で決まったの。コスチュームはヴィルヘルム二世から、ダリ、聖徳太子、関羽様までそろえようかと」

「やめた方が……」

「ね、私ならどれが似合うかなあ。ダリなんか、どう？ それで、企画書なんだけど、もちろん久瀬くん書いてくれるよね」

一番上に企画名だけがペンで『卑下喫茶』と書かれている。

俺は机に突っ伏した。

第九話 レインブーツ

曇り空の通学路を学校へ向かう。

今日のマリコさんは、ぱつと見にはそれとわかりにくいダークブラウンのレインブーツ。靴からは、広げるとやたら大きくなる水色の傘が顔をのぞかせている。それに、汗のこもらない素材の防水上着。

完全装備だ。

空気は確実に水気を増している。午後から降る予報だっけ。

……あ、ヤバイ。

俺としたことが折りたたみを忘れてきた。置き傘もない。道ばたの紫や青に染まつた紫陽花が目にとまる。

雨降りの花。

意気消沈した俺とは反対に、マリコさんは顔を輝かせた。

「久瀬くん、梅雨っていいよね。紫陽花、きれいだし」

「雨ばかりで俺は嫌いだけど」

そう答えると、マリコさんの顔が少し不機嫌になった。

「でもでも！ 古都に佇むアジサイ寺で、しとしと雨の中に一面の紫陽花だったら、久瀬くんも雨とか梅雨とか、好きになるかもしれないよねっ！」

「それはどうかな。……っておい、どこ行くんだ、待てよっ！」

マリコさんはプリプリしながら、どんどん先に行ってしまった。

ケンカ、だったのか。

結局マリコさんとは、朝から一度も声を交わしていない。

昼過ぎに降り出した雨は、放課後になっても止まなかった。

むしろ、少し強くなっただくらい。

濡れて帰るしかないか……。

ふと、後ろに誰かの気配。

「入らない？」

マリコさんが大きな水色の傘を広げている。

「いいのか？」

「だけど、条件があるよ。雨の散歩を楽しむこと。アジサイ寺につきあうこと」

「……了解」

マリコさんと、一つ傘で雨の中を歩く。

色とりどりのアジサイの花。

小さく輝く雨のしずくは、晴れの日に見られない表情。

かすむ空気に、とけ合うような調和。

雨の日も、そう悪くないのかもしれない。

「持ってた！」

傘を俺に預けると、マリコさんは大きな水たまりに飛び込んだ。はねる水。笑うマリコさん。

俺もレインブーツとか、……買ってみようかな。

第十話 矢立

「みてみて。珍しいものもらっちゃった」

マリコさんが帰り道に見せてくれたのは、金属でできた柄杓ひしゃくのような形をしたものだった。水を汲むのにあたる部分に蓋があつて、蟹がハサミを振り上げている。

「おばあちゃんからもらったんだけどね、矢立って言つらしいの」

「ふーん。武器？」

「違うわよ。ここを開けるとね……」

マリコさんが蟹のところを指先でくつと開くと、中には真っ黒いものが詰められていた。

棒を下に傾けると、細い筆が滑り出してくる。

「墨付き携帯筆入れてるところかしら。筆ペンみたいなのがまだない昔は、こんなの使っていたみたい。ちよつとした骨董品かも。なかなか見かけないもんね」

筆の先を、黒いところにチョンチョンと当てる。墨汁が含まれているらしく、筆の先端が湿って黒光りしはじめた。

「ね、この前アジサイ寺にいった時の匂って、何だっけ？」

「俺も忘れちゃった。……いや待てよ、『岩黒く細雨さやめに濡れる紫陽花あじさい』だっけな？」

マリコさんは和紙の細長い束を取り出すと、すらすらと筆を滑らせる。

「はい。こうやって書くと、それなりに風情が出るでしょ」

筆で縦書きしただけで、なんか格好いい。縦に伸びた柔らかかなひらがなの線は、まるで流れる水のようなうた。

実は、崩し字はなんて書いてあるのか全然読めないけれど、線の動きを見ているだけで、霧雨も、紫陽花も、ふつと脳裏に浮かんでくる。

「へえ……。なんかいいじゃん。このまま床の間に飾っても良さそ

うだな」

「じゃあ、あげるよ」

「さんきゅっ」

「えへへ……。久瀬くん、もしかして、また私に惚れた？」

「ああ、惚れたね」

「そうですか。またまた惚れましたかあ……」

マリコさんは満足げに頷いている。

こうして外で、筆を動かすのも面白いかもしれない。

帰り道、途中の文具屋に寄って、カバンに筆ペンを忍ばせてみることにした。

第十一話 忍びの者

「隙ありっ」

風きり音。

反射的に身体をそらせる。

黒いものが目の前をよぎった。

さらに近づく気配に、身体をひねる。

遅れたっ！

制服をかすり、切り裂かれた繊維が宙に飛び散る。

「く、曲者！」

「いかにもっ」

顔を隠した忍び姿の人影が、木陰から現れた。

口元覆う布をはずす。

「ふふふ……。びっくりした？」

マリコさんだった。

俺の後ろの木に深々と突き刺さっていたのは手裏剣。

……っ、あつぶねえ！

「おいっ！ 何の真似だよ！」

「えへへ……。どう？ 私のクノイチ姿。かっこいい？」

それどころじゃねえだろっ！ と、一喝するつもりだったのだが……。

マリコさんは、真剣なまなざしで俺をじっと見つめている。

後ろで髪を一つに束ね、忍び装束に身を包んだマリコさん。

顔の横で揺れる残り髪。憂いを含んだ表情。

それは陰として生きる悲しみ。

そして瞳には、その悲しみさえ乗り越え生き抜く、凜とした強さ。

「かつこ……いい」

「よかったあ！」

さっきまでのシリアスなクノイチは一体どこへ行ったのか。手を

たたいて喜ぶ女の子が目の前にいる。

これぞ忍法七変化？

「実はでござる。久瀬^{くせ}氏がボツに致したヒゲ喫茶の代替案として、総合エンターテイメント『忍者喫茶』をひらくことにあいなりもうして……、ニンニン」

「それもボツだ。ボツっ！」

「えええ〜。折角、忍術の稽古に励んでいるのに……」

「だからって人に向かって手裏剣投げるなっ！ 避けられなかったらどうする！」

「うふふ。久瀬くんなら絶対、避けてくれるもの」

無茶苦茶だ。

でも、怒りはマリコさんの笑顔が消し去ってしまった。

これも、忍法？

やはり忍びの者、おそるべし。

いや……、マリコさんおそるべし、かな。

第十二話 季節外れ

「隙ありっ！」

風きり音。

何かが飛んでくる気配。

俺はとっさに身をかわす。だが、そんな必要もないほど、だいぶ外れて何かが横切っていった。

地面に転がったのは、黒い先端に、緑、赤、黄色の羽根。

「ダメだよ、ちゃんと打ち返してくれないと」

マリコさんが羽子板片手に木陰から姿を現した。夏服の紺と白のコントラストに微妙なマツチ。何やらスポーティーな感さえある。

「……ところで今、正月だっけ？」

うつん、と首を左右に大きく振るマリコさん。

「だけど、久瀬くんいずれにしても負けだから。スミね、スミ」

腰から抜くはお祖母ちゃんから頂いたという矢立。華麗に筆を取り出すと、そのまま俺の頬へと走らせる。

ひやつとして、ちよつとくすぐつたい。

……って、何で俺が墨を塗られなきゃならないのさっ！

「だって負けた方に、×とか。とか芸術的に書くのが勝った方のつとめでしょ」

マリコさんが差し出した鏡に写った俺の顔。頬にツツと一筋の線。なんか寄り目にして『おひけえなすって』とか言つと、アレな雰囲気だ。

「でもさ、いきなりじゃねえか？」

「手でも足でも頭でも、羽根を打ち返すくらいできるでしょ？」

それだと羽根突きとは全く別ものになってしまっじゃ……。

などと考えていると、

「隙ありっ！」

新たな羽根がスマッシュ！

回転レシーブを試みるも微妙に届かず。

「さらに隙ありっ！」

羽根突きって、もつと優雅な遊びじゃなかったかあ？

「はい、ミスはスミね！」

マリコさんが矢立から取り出した筆を片手に妖しい笑みを浮かべて迫ってくる。

なるほど。こんなスポーツ羽根突きなら、季節外れでもなんでもないのかも。

そうは思いつつ、無防備に墨を受けるほど俺の心は広くない。走りだす。

「久瀬くん、逃げるとは卑怯ナリ。待てっー！」

「だれが待つかっ」

鬼ごっこに季節って、あつたかな？

少し走っただけで、汗がにじむ。夏空も、もう目の前だ。

第十三話　　ひっぱる

「まてまてえっ！」

マリコさんが、潮風に髪をなびかせて追いかけてくる。

「断るっ！」

「なんですとおっ！　久瀬くん、まてえっ！」

焼けた砂浜。太陽がまぶしい。

梅雨明け早々、マリコさんがポツリと言った「海」の一言で、俺達は海水浴にきていた。

お約束だと、水着姿のマリコさんの方が『ふふふ……。追いついてご覧なさいっ！』とか言っただけで逃げているシーンかもしれない。

だけど現実には、立場は逆。波打ち際に水しぶきを上げて、俺が逃げ回っていた。

幸い、客は少なくて走り回れる余地は十分にある。

マリコさんの息遣いが背後に迫った。

「おい……。つい……。たっ！！」

タツクル！

腰に衝撃。視界は暗転。でんぐり返し。

俺は砂浜に顔面から突っ込んでいた。口に広がるジャリジャリ感。まさに砂をかむ味。

「ぶっ、ぺっ、ぺえっ」

「ふふふ……。もらったっ！」

マリコさんがのしかかってくる。身体は小柄で華奢なのに、俺は完全に組み伏せられて全く身動きが取れない。

「おとなしくお縄につけえ」

「ってっ！　いつ、いたたたっ」

関節を逆にとられ、観念した。

見上げれば、どこまでも青い、雲一つない空。吹き抜ける潮風が、火照った肌の汗を冷やす。

俺は目を閉じた。
そして……。

筆が頬を撫でる。

「はい、スミね」

目の前には、筆を片手にご満悦なマリコさん。

「ってさあ、なんで海まできて羽根突きのさっ！ 季節外れ！
常識外！」

マリコさんは目の前で指を左右に振ってみせる。

「ノンノン！ ローマ字で、HANETSUKIね」

そういう問題じゃないでしょが。

「SUMOに並ぶ格闘技として世界に輸出するんだから」

「そもそも羽根突きって格闘技かよっ！」

「一つの羽根を巡る攻防はまさに格闘、じゃなくて？」

「はいはい……」

潮騒が響く。

夏はまだ始まったばかりだ。

第十四話 自販機

海はいい。

他に海水浴客がいなくてプライベートビーチ状態ならなおのこと。海の家が林立する公営海水浴場から、山をひとつ越えた浜辺に俺達はきていた。

喧噪に包まれた海水浴場をあとに、濃い緑の木々が生い茂る山道を登る。がれきばかりの急な坂を下ると、小さな湾。猫の額程の砂浜。

細かな砂を、透き通った波が柔らかに洗っている。

浜辺から海に目をやれば、両側から伸びた岬の間には、濃い青色と白く泡立つ波頭がかいまみえた。

背後の崖に生えた木。大きく張り出した枝が、焼け付く太陽を遮る木陰をつくっている。遊び疲れたマリコさんはその下にビニールシートをしいて横になっていた。

水着姿が眩しすぎて慌てて目を逸らす。

誤魔化すように近くで寝そべりながら、俺も文庫本のページをめくっていた……はずだった。

でも、気が付くと船を漕いでいた。

そこへふと、頬にひんやりとした清涼な刺激。

びっくりして目を見開くと、マリコさんが水滴で曇った細身のガラス瓶を俺の頬に当てている。

「びっくりした？」

「ああ、びっくりした」

マリコさんは嬉しそうににこにこしてる。

「久瀬くん、ジュース飲もうよ」

その時気づいた。ガラス瓶には王冠がついたまま。

「マリコさん、これどこで買った？」

「自販機」

マリコさんについて行くとレトロなガラス瓶専用の自販機が茂みの裏にあった。木目調の化粧板。百円玉にしか対応していない。お金をいれると留め金^が外れて扉のガラスが開く。そこから瓶を一本だけ取り出せる仕組みになっていた。

コインを入れる横に、小さな金具がついている。どうやらこれが栓抜きらしい。

「ここで蓋取らなきゃいけなかったんだ。……で、どうやるの？」
斜めに口をあてがって、てこの原理で瓶を持ち上げると王冠が外れた。

「なるほど。久瀬君、物知りだね」

瓶の口を咥えるようにして俺は冷えたジュースを飲み干した。

第十五話 職業病

「久瀬君！ 私、病気だったのっ！」

「なにっ！」

マリコさんが新聞片手にかけてきた。俺の机に広げられた紙面には、『突発性過敏性創造性障害』という病気の記事があった。

自称アーティスト、あるいはクリエイターに多いという。創作活動に入ろうとすると、急に背中や耳、頭が痒くなったり、爪が伸びているのに気づいて爪切りを始めたり、机と椅子の位置やバランスがしっくりこなかったり、創作に使う筆や紙などの道具やパソコンのソフトのプロパティなど、無駄に細かいところが気になって弄りはじめてしまうらしい。

ネットに繋がっていると症状は悪化するという。スパムしか来ないメールボックス、誰も読まない自分のブログや掲示板への書き込み。はたまたほかのサイトの更新状況まで気になって、延々ネットサーフィンに走ってしまう。

ネットから切っても、窓の開き具合から時計の秒針の音まで、五感から入るありとあらゆることに過敏になって、結局一時間も二時間も無駄にして創作活動に打ち込めなくなる。

一種の職業病だ、と記事はまとめられていた。

「マリコさんのも……これ？」

「そうっ！ 今ね、新しい遮光器土偶のデザインしてたんだけど、描こうとするたび久瀬君にメールしなきゃいけない気がして」

ここ数日、恐ろしいほどの勢いで来ていたメールの原因はそれか。

「単なる逃避行動じゃねえの？」

「違うの、病気なのっ、職業病なのっ！」

マリコさんは頬を膨らませている。

「……で、遮光器土偶っていったい何？」

「学園祭で看板代わりに出すモニュメント。……ね、やっぱりハ-

ト型土偶の方がかわいくてよかったかな？」

「さあ……」

「ミミズク土偶も良かったんだけど。あ、『踊る埴輪』とか『武人埴輪』は駄目よ、メジャーすぎるから」

「遮光器土偶も十分メジャーだと思うけど」

「そうかな。ま、せつかくのヒゲ喫茶だし、ヒゲ映えする方がいいからね」

遮光器土偶にヒゲ。

……謎だ。

第十六話 街全体がトイレ

秋晴れ。澄んだ空気はひんやりとして、ぴりつとした感触が気持ちがいい。

そこに甘い香りが漂ってくる。

「あ、キンモクセイ」

マリコさんの指さす先にはオレンジ色のちっちゃい花が咲く色の濃い木があった。

「いい香り！……ね、久瀬君。キンモクセイ好き？」

「ま、嫌いじゃない」

「だよ、仲間仲間！」

しばらく歩くとまた甘い香りが流れてくる。

「やっぱり秋って感じだよ。……ところが！前に聞いたんだけど、某先生はこの時期、街全体がトイレみたいで落ち着かなくなるんだって」

「どういうこと？」

「昔はトイレ用の芳香剤といえばキンモクセイだったみたい。だから逆に今はキンモクセイの花の香りでトイレを思い出しちゃって、自然ともよおしたくなるから困るんだって。……それにしても『街全体がトイレ』って考えるとすごいよね。通りにずらあっと、数メートルごとにトイレが並んでるの。現代アートもびっくりだよ」

そりゃ尋常ではない。落ち着くはずも無いだろうな……。

「じゃなかったら、中世の城郭都市みたいにくるつと壁が街を囲んで、街の中央に向けてくぼんで巨大な池があって、実は街全体がトイレでした……とか」

「普通そう言う想像するか？」

「でもでも！中世とか昔のヨーロッパって、夜の間にしたのをおまるに貯めて、朝になったら二階の窓から下の通りに向かって撒き散らすんだよ。だから道にみんなたまってるんだよ。雨とか降ると

もう大変、街全体がトイレって言っても全然おかしくないんだよ」

「それ、マジ？」

マリコさんは神妙な顔つきで頷いた。

「……マジ。衛生概念ゼロ」

「げえ」

「だから中世ヨーロッパをモデルにしたファンタジーに出てくる都市も、突っ込むと本当はそんな感じだよ、きっと」

「えええっ！」

「だいたいお風呂にもろくに入らないで長旅していたキャラなんか……」

「お、お願いだマリコさん。それ以上は……」

「でもきつとそうなのよん」

「ノオオオっ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1627h/>

マリコさん　～ 謎な彼女は今日も元気～

2011年3月12日16時28分発行